

サルトルと革命民主連合(RDR)

海老坂 武

一 背景

① 恐怖と憎しみの年

一九四七年は米ソの対立が激化した年である。トルーマン宣言(三月)と共に、「外からの圧力」を受けている国々にたいするアメリカの援助が約束され、これにもとづきマーシャル・プランが提示された(六月)。ヨーロッパ諸国は、東か西かの選択をここでせまられる。ソ連側も十月にコミンフォルムを結成して西側からの攻勢に対抗。翌年の二月にはチェコスロヴァキアで共産党が事実上のクーデタを起こして政権を奪取し、以後一党独裁の体制が東欧全体につきつぎに波及していくことになる。

フランス国内においては食糧難と燃料不足が重なり経済危機が進行していた。またインドシナではホー・チ・ミンのゲリラ闘争が開始され(四六年十二月)⁽¹⁾、マダガスカル島では大規模な暴動が起こる(四七年三月)⁽²⁾など、海外植民地における独立運動が政府をゆさぶり続けていた。こうした中で、社会党出身の首相ラマディエは、トレレーズ(共産党

書記長)がルノー工場のストライキを支持したことを口実(3)に共産党の閣僚を切りすて、これによって四五年以来のフランスの政権の基本的な構図であった、人民共和派、社会党、共産党による〈三党政治〉は決定的に分解した(四七年五月)。野におりた共産党は以後姿勢を硬化させることになる。

ドゴールが政界に復帰したのも四七年のフランスの政治状況の変化をまねいた重要なモメントである。彼は四六年一月に政権の座を降りて以後蟄居していたが、この年四月、全体主義的な綱領を持つフランス国民連合(RPF)を結成し、冷戦のはね返りである反共主義の風潮に乗じ、右翼勢力を糾合していった。そして、十月の地方選挙では、共産党と社会党だけが辛じて従来の勢力を維持し、人民共和派、急進社会党などの中道政党の支持層の大半は、フランス国民連合に引き寄せられてしまったのである(四〇%の得票率)。

このドゴールの勝利それ自体は、選挙が地方選挙であったこととか、その後の戦術的失敗とかで長続きしなかったが、それは中道勢力の右傾化を映し出していたと言える。この右傾化の仕上げをしたのが十一月から十二月にかけてのストライキと、これに続く組合の分裂である。すなわち、最低賃金の保障その他を要求するストライキが十一月初旬から始まり、各地で激しい暴動を伴いながらフランス全体に広がっていったが、辞職したラマディエ内閣の後を継いだシューマン内閣は、ストライキ規制法案をとおし、武力弾圧に訴え、一時は内戦前夜の様相さえみせたこの大ストライキを押しつぶした。その過程で、最大の労組である労働総同盟(CGT)の小数派(社会党系)は、政治化していくストライキに中途から反対し、スト継続を主張する多数派(共産党系)から分かれて独自の組合、労働者の力(F〇)を結成したのである(十二月)。このストライキの失敗と組合の分裂によって共産党は政治勢力として孤立化し、

社会党は以後右翼路線にのめりこんでいくことになる。

アレクザンダー・ワースはこのフランスの一九四七年を、「鋭い恐怖とおそろしい憎しみの年」と呼んでいる。⁽⁴⁾

一九四七年における内外のこうした状勢の変化の中で、サルトルの政治へのかかわりにも微妙な変化が生じてくる。その変化は、翌年の革命民主連合(RDR)の結成によって具体的な形をとるが、いくつかの徴候はすでにこの年にあらわれていた。その第一が〈ニザン事件〉である。

② 〈ニザン事件〉

独ソ協定とこれに対するフランス共産党の対応を不満として脱党したポール・ニザンが警察のスパイであったという噂は、彼がノルマンディーの戦線で死んだ(一九四〇年五月)直後からすでに共産党員のあいだでささやかれていた。ボーヴォワールの回想録には、Bという人物の言葉としてこのことが記されている。⁽⁵⁾

噂は戦後になってもくすぶり続け、さらにアンリ・ルフェーヴル——かつてはニザンと同じ〈哲学者グループ〉に属し、雑誌ラ・ルヴェ・マルクシストと一緒に出版していたルフェーヴル——がその著書『実存主義』の中で、ニザンを公然と中傷したところから再燃し、⁽⁶⁾〈事件〉へと進展することになった。すなわち、サルトルをはじめとして二十四名の作家、評論家は、四七年三月二十九日号のル・リテレル紙に公開状を発表した。⁽⁷⁾そしてある共産党員(実はアラゴン)の、「ニザンは共産党の活動について内務省に情報を提供していた」という私的発言を紹介し、かつルフ

エーヴルの文章を引用しつつ、ニザンをスパイ呼ばわりするならばその証拠を呈示せよ、と直接にはルフェーヴルに、間接にはアラゴンその他の黨員文学者に返答をせまったのである。

これに対し、ルフェーヴルもアラゴンも口を閉ざして回答の気配を見せなかった。ところが、反撃が思わぬところからやってきた。黨員文学者が多数を占める全国作家委員会（CNE）が、サルトルらの公開状を同委員会の会員に対する個人攻撃であるとして、ニザン問題についてはふれぬまま、公開状の署名者を非難する声明を発表したのである⁽⁸⁾。そこで、問題はニザン一個の名誉回復にとどまらなくなった⁽⁹⁾。二十五人の署名者の方は六月に再度公開状を⁽¹⁰⁾、CNEの声明（つまりニザン問題への沈黙）と、ルフェーヴル、アラゴンからの無回答を理由として、〈密告者ニザン〉の証拠は呈出されなかったことを確認して事件に終止符をうったが、サルトルは個人的に声明をつけ加え、さらに追求の姿勢を見せた。第一に彼は、彼自身その一員であるCNEのあり方を問題にし、「CNEはかつて、共産党からの攻撃に対し自分を擁護したことがあるか」と逆襲する。第二に、先に公開状の中で紹介したニザンへの誹謗はアラゴンから直接耳にしたものであることを明るみに出し、あらためてアラゴンに対しその真偽のほどを質したのである。この追求は、CNE内部に動揺を惹き起こしたと見え、以後、会員に対する個人攻撃には本人からの要請がないかぎり介入せぬ、という方針を立てさせることになる。他方共産党の側からは、〈ニザン事件〉は要するに、サルトル一派が仕組んだ反共宣伝である、というキャンペーンを招き寄せることになった⁽¹¹⁾。

以上が〈ニザン事件〉のあらましである。この事件は共産党に対するサルトルの態度の変化を告げている点で興味深い。すでに述べてきたように、一九四五—一九四六年のサルトルは、理論的な次元では黨員知識人と激しい論争を

かわし、罵詈雑言を受けながらも、ポーヴォワールの言葉を引けば、「彼らの敵意を和げようとする執拗(じじ)」を持たせていた。ところが、このニザン事件ではもうそれが見られない。友人ニザンの名誉回復にかかわる問題であるにせよ、この時期に自分から音頭をとって公開状を発表し、そこにレイモン・アロン、フランソワ・モーリアックなど札つきの反共主義者の署名をそえさせたとき、〈事件〉が政治的な性格を帯びることは目に見えていたはずである。それをあえて行なったとき、サルトルは和解の忍耐をすでに棄てていた、すくなくとも和解をしいて求めようとする意志をすでに失っていた、と考えることができよう。

③ 『文学とは何か』における〈ヘアンガジュマン〉の位置

こうした態度の変化は、この年の始めからレ・タン・モデルヌ誌に連載されていた『文学とは何か』の中でもっと明確に示されることになる。このテキストは言うまでもなく〈ヘアンガジュマン文学〉(littérature engagée)の理論的基盤を提示しようとする試みであった。レジスタンスの中で政治行動の領域から表現の領域へと次第にその意味の枠を広げていった〈ヘアンガジュマン〉が、ここではじめて文学の問題として正面から問われたのであり、書くことと読むこと、作者の状況と読者の状況の分析をおして、〈ヘアンガジュマン文学〉なる概念はこのテキストの中で確立されたと言つてよい。

けれどそのことは、このテキストを一つの政治的言説として読むことを妨げはしないし、それどころか、当時の政治的文脈の中でしか理解できない側面もある。たとえば第四章「一九四七年における作家の状況」であるが、これは

サルトルがはじめて共産党の分析と批判を忌憚なく公にした文章として記憶されてよい。⁽¹³⁾ すなわち、米ソの対立の激化と第三次大戦の脅威の中にあつて、共産党の主要目標は革命をすることではなくソ連を防衛することとなった。そこから、一方では革命的ポーズをとりながら大衆の信頼をつなぎとめ、他方ではブルジョアジーに手を貸して時を稼ぐという曖昧な政策が出てきた、というのが彼の分析の概要であり、こうした「革命的状況の腐敗」、とりわけここに生ずる共産党の保守主義と日和見主義を批判するのである。

ここでまず興味深いのは、その箇所の批判が党の政策に向けられているというよりは、党と知識人（作家）との関係に、さらには黨員知識人（作家）の在り方に向けられていることであり、しかもそのどの行にも〈ヘニザン事件〉の影が濃くおちていることである。たとえば、共産党知識人の保守主義を批判する次の一節はあきらかに〈ヘニザン事件〉を念頭において書かれたものであろう。

「彼らは反対者には決して答えない、反対者は信用を傷つけられ、警察のもの、情報局のものであり、ファシストということになる。証拠はと言えはぜったいに示されない。おそるべきものだし、あまりにも多くの人をまきぞえにするからという理由で。それでも証拠を知りたいと誰かが言い張ると、そこまでにしておくと、告発を言葉どおりに信じると、答が返ってくる。『証拠を出すところまで追いつめないでくれ。そんなことをすりゃ後悔するぜ』と」⁽¹⁴⁾

またブルジョア知識人が党内でどれほどうさんくさい目で見られるかを語る一節はニザンその人を対象としている。意地悪く読むなら「人は作家としてとどまりながら共産黨員でありうるか？」という、結論部におかれたこの問題設定そのものが、〈ヘニザン事件〉に対する忿懣をたたきつけるために立てられた罫の問い、問いの罫ではないか、とも

勘ぐりうるのである、というのも、なるほどこの問いは一つの文脈にそって出されてはいる。⁽¹⁵⁾ けれどもサルトル当人はどうかと言えば、この時期に入党の問題を切実に考えていたとも思われぬ。戦前にも、またレジスタンスの中でも、とりわけ共産党系知識人によって主導された全国作家委員会に加わって以来、入党の問題はたしかにサルトルに出されていた。けれども、この問題に肯定的に取りくんたことがあるかどうかはたいへん疑わしい。この問いはむしろ、彼の思考のバネの役割を果たしていたと私は考える。いずれにせよ、それは答の留保された問いとしてあった。ところが『文学とは何か』の中ではこの問いが正面から呈出され、しかもきわめて激しい口調で、妥協の余地のない「ノン」が宣告された。内的確信であった「ノン」が公の場に引き出され、原理的正当化として確認されたのである。問題はやはり、共産党との和解の意志を放棄したその基本的姿勢にある。ニザン問題についての公開状はその一つの現われであったが、〈事件〉の進行、とりわけ党員知識人の動きはサルトルのい[○]や[○]気[○]にはずみをつけ、「人は作家としてとどまりながら共産党員でありうるか？」という問いをとおして、戦後メルロロオ[○]ポ[○]ン[○]ティ[○]にならってみずから課していた役割をここでいったん棄てた、党員知識人との関係の清算をここで試みた、と見る方があたっている。この新たな態度決定は、戦後すぐにサルトルがみずから与えたアンガジュマンの型の修正を意味するはずであった。なぜならそれは、「アチブル知識人とコミュニニスト知識人の間に橋を架ける」という役割の意識に支えられていたのだから。⁽¹⁶⁾ 「われわれはまだ自由なのだから、共産党の番犬たちの群には加わるまい」と党員知識人に罵倒を投げ返したとき、それまでの役割の意識は放棄されたとみななければならない。

だとするならば、彼のアンガジュマンの方向はそのときどうなったか。この時点で彼はいかなる政治的展望を抱こう

としていたのか。第四章の最後の頁に近いところで、彼はこの問いに一つの答、すなわち、「第三の項」としての「社会主義的ヨーロッパ」の建設という答を呈出している。けれども、これ以後の時期のサルトルの活動について今日われわれが持っている知識を排除しつつ、順を追ってテキストを読んでいくとき、この答の出し方はきわめて唐突であり、奇妙な回路を経ている、と言わねばならない。すなわち彼は、一九四七年におけるブルジョア作家の状況を、個人の読者はいるが読者層 (public) を持たない孤立した状況としてまずとらえた。そこから、読者層の統一を実現するための方法論へと移行し、人格の自由と社会主義革命、政治的自由と物質的自由という二重の要請のために著作の中で闘うべきことを主張した。この二重の要請は二律背反ともなりかねないものだが、作家の役割はまさにこの二律背反を〈受難〉として蒙りつつ〈媒介者〉としてこれを乗り越える点にこそ求められた。つまりサルトルはここで、政治的には放棄した役割の意識を文学の中で復活させているのである。そこから作家における「何をなすべきか」が否定性と建設性の二面から具体的に問われ、言語の再建とか、世界についての証言とか、目的と手段の判定とか、読者の力の開示とかが論じられた。そして結論として「文学全体が(……)倫理的かつ問題設定的となること」、「とりわけ人間のうちに創造者を示すこと」が望まれた。なぜなら壁に囲まれた状況の中で「選ぶべき出口はなく、出口は創り出されるもの」、また一般に「人間は毎日創り出さるべきもの」⁽¹⁹⁾なのだから、と。

ところがここからサルトルは、このわずかな言葉の綱をつたって政治に話を移行させる。そのすぐあとで彼は行を変えてこう書いている。

「とくに、戦争を準備している列強のあいだでわれわれが選ぶほうとすればすべてが失われる。」したがってソ連を

選ぶこともアメリカを選ぶこともできない。ではどうするか。彼はこう答える。

「歴史的行為者とはほとんどいつでも、ジレンマに直面したとき、それまでは目に見えなかった第三の項を突如として出現させる人間のことである。ソ連と英米ブロックとの間ではどちらかを選ばねばならぬ、というのはその通りだ。社会主義的ヨーロッパはと言えば、これは存在していないのだから《選ぶべき》ものではない。それは創るべきものなのだ」⁽²⁰⁾

こうして彼は、まさに突如として、「社会主義的ヨーロッパ」なる概念を持ち出し、文学の機会を「社会主義的なヨーロッパ、すなわち、民主主義かつ集産主義的な構造を持った国家群」⁽²¹⁾の到来に結びつけるのである。

もちろん私は、サルトルが文学の中に政治を押し込もうとしているなどと非難するつもりはない。サルトルの文学論の根底に、作品とは作者の自由に発する読者の自由に対する呼びかけ、というテーゼが据えられている以上、またその作者の自由も読者の自由も現実世界の中に目付けと場所を持っている以上、「文学の要求事項」が政治の要求事項を含み込むのはむしろ当然でさえある。そのかぎりでは、政治的言説と見えるものも文学的言説の中に包括されるべきものとしてある。

そうではなく、私が唐突と感じ、奇妙な回路と言うのは、「社会主義的ヨーロッパ」の建設という、いわば新たな政治的展望が、現実の分析にはほとんど支えられないで、「選ぶべきものではなく創るべきもの」というレトリックを介して不意に飛び出してくることである。「アメリカも駄目、ソ連も駄目、選べぬ以上創らなければ、それには社会主義的ヨーロッパ」というのでは、アイディアとしてはよいとしても一個の政治的言説としてはやはりおそまつであ

り、しかもこうしたアイディアの実現に「文学の唯一の機会」を賭けねばならぬと宣言するとき、この文学的言説の空虚さは、それまで展開されてきた言語をめぐる濃密な思考と奇妙な対照を見せるのである。

けれども、こうした奇妙な思考回路、結末部分の言説の空虚さには、それなりの意味があると私は考える。思うに『文学とは何か』を書いているときのサルトルにとって、政治的展望を持つことはそれほど重要ではなかったのだ。

第三勢力を志向する社会党系の政治家がぼつぼつ口にしていた「社会主義的ヨーロッパ」というスローガンをこの箇所ですべりこませたのは、政治的言説を包括した文学的言説としての完結性をこのテキストに与えるためでしか、たぶん、なかったのである。ということとは、政治的アンガジュマンが否認されたということではまったくない。ただ、自○分○の○問○題○と○し○て○は○、政治行動を一応わきにおき、ないしは括弧に入れ、書くことのうちに自己のアンガジュマンの唯一の可能性を見ようとする、それが一九四七年七月のサルトルの位置ではなかったかと思う。つまり、この時期にサルトルは黨員知識人からの総攻撃にさらされていた。それを受けて「一九四七年における作家の状況」の中で共産党との対決を覚悟したとき、それは従来の彼の政治的アンガジュマンの型の行き詰まりを意味するはずだった。実際、『文学とは何か』の巻末の数ページは、こうした挫折から生ずるに違いない孤立感、悲壮感に濃く彩られている。この孤立感、悲壮感はたとえば次の一節にもっともよく現われている。

「もっとも暗い状況であってもこれを明晰に見るということは、すでにそれ自体、オプチミズムの行為である。なぜならそれは、この状況が思○考○で○き○る○も○の○であること、すなわち、暗い森の中でのようにわれわれがそこで迷っているのではなく、逆に、すくなくとも精神によってそこから身を引き離し、これを眼下に把握し、したがってこれをす

でに乗り越え、この状況に対して、たとえ絶望的なものであるにしても自分の決断を下すことができる、ということの意味している。教会という教会がすべてわれわれを排斥し、破門する時、書くという芸術がさまざまなプロバガンダに締めつけられて本来の有効性を失ってしまったように見える時、まさにその時にこそわれわれのアンガジュマンは始まらねばならない。文学の要求事項を誇張するのではなく、たとえ希望がなくても、文学の要求事項すべてに奉仕すべきなのだ。⁽²²⁾

けれども、この一節からもうかがわれるように、サルトルはそこから政治行動の次元で新たなアンガジュマンの型を模索するというより、孤立した状況を文学の次元で引き受けようとする。政治的アンガジュマンの挫折として捉えられねばならぬものを、アンガジュマン文学のためのモメントとして取り込もうとする。つまりここには、戦争中、「社会主義と自由」の運動を断念したあと「書くこと」の方へ、『蠅』の執筆の方へエネルギーを振りむけていったのと同質の姿勢が見出されるのだ。ボーヴォワールの回想録の中に引用されたサルトルの「ノート」は、もっとはっきりした言葉でこの時期の心の動きを語っている。

「当時わたしの心底にあった考えはこうである。消えさるべき運命にある一つの生き方、しかしいつか再び甦るであろう一つの生き方を証言する以外に為しうることはない。そしてたぶん、最良の作品ならば未来に対してこの生き方の証人となり、この生き方を救うことを可能ならしめるだろう。⁽²³⁾」

政治的アンガジュマンの出口のない状況が文学的アンガジュマンへと彼をのめり込ませていった、⁽²⁴⁾と言いえようか。事実ここでは、文学にはいわば至上の位置が与えられ、⁽²⁵⁾文学のうちにこそアンガジュマンの本質的な表現が求められ

ている。⁽²⁶⁾『文学とは何か』が「政治と文学」をめぐる論争の中で政治優位の書として読まれたとするならこれ以上の逆説はない。いま引いた「ノート」の一節にすぐ続く箇所は、サルトルを革命民主連合の結成へと促した一つのコメントを語っているのだが、この文章は、すくなくとも『文学とは何か』を書いている時期には政治行動に踏み出す気持を持っていなかったことを間接的に告げている。

「というわけで思想^{イデオロギ}上の立場の決定と行動との間で迷うことになる。ところが、わたしが一つの思想上の立場を説くと、人びとはたちまちわたしを行動へと追いやる。つまり『文学とは何か』はわたしを革命民主連合に導くのだ。」

ところでポーヴォワールがこの「ノート」の抜粋を回想録の中に挿入したのは、サルトルが革命民主連合に身を投じた、その個人的な理由を説明するためだった。彼女によればそれは、人々（大衆）から憎まれていると感じたためであるという。すなわち、主観的に大衆に味方するというだけでなく、行動を通じて彼らとの関係を改善し、憎まれている者としての〈客体性〉を取り戻そうとしたからだ、と。だとするなら『文学とは何か』におけるアンガジュマンから革命民主連合におけるアンガジュマンへはスムーズな移行があったわけではなく、また前者の理論が後者のうちに実践的表現を得た、ということだけでもなく、そこには一つの、重要な決断が入りこんでいるわけである。この点についてはまた振り返って考える必要があるだろう。

④ ラジオ番組の担当——政治への発言

一九四七年十月から、レ・タン・モデルヌ誌のグループは一つの実験に乗り出した。フランス国立放送で週に一回（おそらく十五分から二十分）時事討論会のプログラムを引き受けたのである。依頼者は当時の首相ラマディエに直接つながる人物であったというから話としては奇妙である。ドゴール派勢力RPFの台頭と共産党の硬化との間で中道第三勢力の道を搜索する社会党政権が、サルトルのネーム・ヴァリュエを計算しての演出だったのだろうか。またサルトルの側にすれば、マス・メディアの利用を積極的に考慮していた時期だった。ともかくも彼は、「完全な表現の自由」を条件としてこの企画に乗っていった。そのねらいを彼はこう説明している。⁽²⁷⁾——現在フランスには恐怖の^{パニク}雰囲気がみなぎり、大部分のフランス人は米ソ戦が不可避であると信じ込んでいる。その結果国内政治も相敵対するブロックに分極化し、このことによってフランスみずからが東西の緊張を増大させ、戦争を準備していることになる。このような宿命的歴史観をまず打破するキャンペーンを張る必要がある。なぜなら人間は自己の運命と歴史の支配者の⁽²⁸⁾のだから。そして、一般的な観点からだけでなく、フランスの政治の具体的な様相の中でこの考えを主張していくべきである……

一言で言えば、東西のブロック化⇨冷戦構造の打破を志向したわけである。このねらいのもとに、「ブロック政治の拒否」と題する討論会（十月六日）を皮切りに十一月末まで七回にわたって放送番組が組まれた。⁽²⁹⁾

その中でもっとも物議をかもしたのが、第二回目（十月二十日）の「ドゴール主義」をめぐる討論であった。討論参加者たちは、米ソ戦を前提としたドゴールの外交政策や国内政策の不在を批判したのみならず、ドゴールを対独協力者のベタン元師になぞらえたり、RPFの宣伝方法をナチのそれに比較したりしたのである。この放送は、RPFが

地方選挙で大勝した翌日に流されたところから、《ヘラジオに吹く嵐》として大問題と化し、結局これがもとになって、十二月初旬、ラマディエ内閣にかわったシューマン内閣によって、この番組はあっさりつぶされることになる。

このように、レ・タン・モデルヌ誌グループによるラジオ番組の担当は、政界再編成の時期における一エピソードにすぎなかったし、サルトルの側からするなら、マス・メディアを用いて一般大衆に直接訴えようとする一つの小さな実験に終ってしまった。けれども、これを最初の踏み台として、以後サルトルは固有に政治的な活動へ急速に入りこんでいくのである。

その第一歩は、この年の秋、ジョルジュ・イザールを中心に、アンドレ・ブルトン、アルベル・カミュ、ダヴィッド・ルッセ、さらに社会党内左翼反対派（マルソー・ピヴェール他）などと共に頻繁な会合を重ねながら練りあげた「国際世論へのアピール」である。⁽³¹⁾当時ヨーロッパを支配していた戦争宿命論に警告を発した後に、このアピールは、(1)米ソ間の戦争は避けねばならぬこと、(2)この戦争は避けうることを訴えている。避けねばならぬ理由としてあげられているのは、勝利の結果の無意味さ、戦争による現実の破壊の大きさ、戦争準備による経済生活の圧迫、戦争準備による社会的解放の遅延、の四点である。しかし、重要なのは、戦争を避けうるための条件が呈示されている後半部である。すなわち、ヨーロッパが無気力―隷属の状態を脱し、戦争の犠牲者―共犯者となることを拒否すべきこと、ヨーロッパの諸国は積極的に連合して経済協力を行ない、東西の両陣営から相対的に独立すべきことなどが説かれ、そのための具体的な道すじとして、ヨーロッパ各国における社会主義への体制変革と、これに関連した植民地解放とが呼びかけられている。このアピールは十二月に発表され、先にあげたメンバーの他、レ・タン・モデルヌ誌

とエスプリ誌とが署名している。

同じ月にレ・タン・モデルヌ誌は「疑問の余地ある闘いの中で」と題する社説を掲げた。筆者はおそらくメルロオリボンティであろうが、十一月以来の大ストライキの失敗を論じながら、「共産主義かファシズムか」の二者択一を押しつけてくる野に下りた共産党の冒險政策を批判し、「最少限の社会主義的政策が今日可能かどうか、可能とすればそれはいかなる政策か？」という問いを發し、第三の道の可能性の探究を示唆している。

二 革命民主連合（RDR）の実験

① RDRの起源

RDRが一つの政治運動として正式に発足したのは、一九四八年の二月末である。日付けをやや詳しく追うと、二月末にマニフェストが發せられ、三月に入ってから、十日に世話人による記者会見、十二日に結成集会、十九日にワグラム会場で大衆集会、という形で次々にアピールがなされている。

RDRは当初からサルトルをはじめ、ダヴィッド・ルッセ、ジョルジュ・アルトマンなど作家、ジャーナリストとして名の知られた知識人を押し出していたために、知識人グループの主導した運動のように見られていた。しかしその起源はむしろ、パンセ・ソシアリスト誌に陣どる社会党内の少数反対派グループ（ジャン・ルウ、ジェラルド・ロザンタル、ブーヴィアン、ランベール）の動きのうちに求められる。少くとも〈革命民主連合〉という語が初めて公に發せられたのは、四七年十一月、ジャン・ルウその他何人かによって、十二月十四日から予定されていた社会党の

全国大会に向けて出されたアピールの中においてであった。⁽³²⁾

ここで彼らは、ドゴール派の台頭と共産党の〈冒險政策〉との間で右翼中道主義に押し流されていく社会党の議員勢力を批判し、シューマン内閣への協力拒否を訴えたのである。と同時に、社会主義的なプログラムを持った政府を望むことが不可能な〈移行期〉においてなすべきこととして、指導者間の政治的取引による〈第三勢力〉ではなく、労働者勢力とその闘争に根ざした勢力の結集を提案し、次のように書いている。

「大資本に奉仕する国家の全体主義的連合であるRPFに対して、労働者勢力の〈革命民主連合〉を対抗させるべきときが来た。社会黨員はこの連合の推進者となるだろうが、この連合はあらゆる未組織勢力に広く訴えかけるべきであり(……)諸政党の単なる結合として呈示されるべきではない。革命的民主主義の運動は、社会正義と平和と自由を欲するあらゆる政党の活動家たちに、あらゆる青年に、あらゆる女性に、あらゆる労働者に、あらゆる生産者に訴えかけねばならない。それは政党に取ってかわりもせず、政党に固有の領域でこれと競うこともない。それは反動に対する闘争と、労働者の諸要求のための闘争を統一するものである。」

この文章は、RDRがまず第一に、ドゴール派の〈連合〉(Rassemblement)に対抗するものとして構想されたこと、第二に、当時社会党の指導部が探っていた上からの〈第三勢力〉の道に対抗して、いわば下からの統一戦線を志向して構想されたことを明白に告げている。⁽³³⁾そしてこの方向に沿って知識人グループの動員がはかられた。他方、知識人グループの方でも、G・イザールを中心とした「平和アピール」の準備を通じて、この構想に乗っていくだけの共通の素地が形成されていたわけである。

② R D R の綱領

R D R 結成のアピールは二月末に出され、コンバ紙とフラン・ティール紙に紹介された。これによれば R D R の方向は一応次のように規定されている。

「資本主義的民主主義の腐敗、ある種の社会民主主義の弱点と欠陥、およびスターリン的形態への共産主義の限定、これらの間にあつてわれわれは、革命的民主主義を旨とす自由な人間たちの連合が、自由、人間、尊厳といった諸原則を社会革命のための闘争に結びつけることによって、これらの諸原則に新たな生命を与えることができる、と考へて⁽³⁴⁾いる。」

組織形態や政策内容についてはほとんどふれられておらず、全体にどちらかと言えば心情の言葉で綴られている。たとえばアピールの末尾には、「万国のプロレタートと自由な人間よ、団結せよ」の一句が、次にこれと並んでサン・ジュストの「幸福とはヨーロッパに生まれた新たな観念である」の一句が置かれている。

アピールの署名者は、サルトル、ルッセ、アルトマン、ルウの他に、ロジェ・ステファンヌ（コンバ紙）、ポール・フレース（エスプリ誌）、シャルル・ロンサック（フラン・ティール紙）など、ジャーナリストの名前が多く見られる。また、当時植民地セネガルから代議士として選ばれていたレオポルド・セザル・サンゴール（現セネガル大統領）の名がみられるのが注目される。

綱領はと言えば、このアピールにこたえて参加してくるメンバーの討議の中から練りあげられるべきもの、と考へ

られていた。したがって、世話人たちが当初RDRの理念や目的について語ったときにも、力点の置き方は異なっていた。たとえばルッセは、RDRの機関誌(月二回)として創設されたラ・ゴージュ紙の第一号でこう書いている。

「われわれは一つの綱領を、ただ一つの綱領を持っているだけだ。民主主義に生き生きとした社会的基盤を与え直すことである」⁽³⁵⁾

同じ号に、大衆集会でのサルトルの発言の抜粋が載せられているが、その中で強調されているのは「自由」である。彼はこう述べている。

「RDRの第一の目的は、革命的諸要求を自由の観念に結びつけることである。」

RDRの綱領草案が一応まとまった形で呈示されたのは、発足してから三ヶ月たった六月の月である。この草案は形の上では討論の素材として呈示されたものであるが、実際にはRDRの組織形態と外交政策を方向づけることになった。また同じ時期に、サルトル、ルッセ、ロザンタルの三人によって討論会が持たれ、そのテキストが発表された。これは、世話人グループによる綱領草案の補足説明であると同時に、これに対する各人の意見表明とみなすことができる。また部分的には、活動家たちの間で当時進行していた討論を代弁していたに違いない。そこで、綱領草案と討論会のテキストを突き合わせてみると、RDRの全体としての方向を、ほぼ次のように確認することができる。

(a) 組織形態

RDRは政党としてではなく、連合(Rassemblement)として構想された。すなわち、既成政党に属しながら同時にRDRに加わりうるという二重加盟を認めた。既成政党の中では表現の欲求を十分に充たしえない活動家たち、な

らびに未組織の大衆を結集して、具体的な個々の目標へむかっ^ての行動^における統一^を実現する、というのがその積極的なねらいであった。別の言い方をすれば、これらの活動家や一般の大衆に表現の場を与えることによって、政党の活動によっては覆いつくされぬ「政治的空白」を埋めようというのであ^った。⁽³⁷⁾

他方、内においては、RDRは組織化を五つのレヴェルにおいて考えている。生産の場における企業内RDRと消費の場における地域RDRを中心に、これを取りまくように農村RDRと青年RDR、さらに植民地居住者を対象とした海外RDRが設置された。もっともユニークなのは第二の地域RDRの構想であろう。これは当時の世相を反映し、ここでは、闇市や物価の上昇に対する闘争、消費組合運動などが直接目標の中に組^まれて^いる。⁽³⁸⁾

(b) 中心的任務

このように構想された〈連合〉の中心的任務は、一言で言えば、「民主主義に生き生きとした社会的基盤を与え直すこと」であった。権力奪取を目的としないわけではなかったが、それ以上⁽³⁹⁾に、権力奪取のための闘争の中に民主主義を——一つの集団がその底辺において行動の責任を取る可能性⁽⁴⁰⁾として定義される民主主義を——機能させることが重要な課題として設定された。この意味では、RDRは階級闘争を中心的に担う組織⁽⁴¹⁾であるというよりは、「この闘争の各時点がプロレタリア解放の一段階であるという条件」を作り出そうとする、さらには権力奪取後の政治形態（労働者民主主義）を実験的に先取りしようとする、運動⁽⁴²⁾であった。

こうした民主主義を具体的に保証する作業として企てられたのが、要求事項書（*caliers de revendications*）の作成である。すなわち、それぞれの地域、工場、村などの利益を代表する各セクションがそれぞれの要求事項書を作成し、

ついで調整の段階で他のセクションと連絡を取りつつ全体としての具体的な要求を綜合していく作業で、すでに一七八九年の大革命当時に先例を見た試みである。この要求事項書をとおして、中央の指導委員会と下部のセクションとの「垂直方向の意見交換の永久運動」と、「中央からまったく独立した、下部セクション同士の永久につづく連絡」を同時に確保しようとしたのである。

RDRの推進者たちに、このような形での民主主義をあらためて提起せしめたものは、既成の左翼政党における党内民主主義の不在という状況であった。それは社会党においては議員集団と活動家集団との分離という形で、共産党においては一枚岩的官僚主義化という形で表われていた。ただこのような状況がどこから生じたかについての説明となると、ソ連における権力の変質、党と国家の一体化による官僚的ハイラーキーの形成を強調するルッセの雄弁と、サルトルの留保、沈黙とが奇妙なコントラストをなしている。この時点では、マルクス主義の用語を駆使してスターリニズムを批判する旧トロツキストのルッセの方が明らかに議論をリードしている。サルトルの発言のうちにソ連批判が見られないわけではないが、それはまだ理論的な言語になりえていないのである。

(c) 外交政策

国際状況の緊張がRDR誕生の有力なモメントであったところから、外交政策には大きな比重が与えられている。基本的には四七年末の知識人グループによる「国際世論へのアピール」を踏襲し、東西両ブロックのどちらかにつくことを拒否する社会主義的中立ヨーロッパの構想をそのまま取り入れている。ただ、このアピールではふれられていなかった、マーシャル・プランへの対応の姿勢が明らかにされているのが注目される。綱領草案は「戦後のヨーロッパ

バ経済の現状においてはアメリカの援助が必要であること」を認め、「否定的な反対姿勢は不毛であり、それはこのプランを分裂と戦争の最大の武器にしようとししている勢力を助長するであろうこと」を考慮し、「マーシャル・プランの軍事化に反対して闘うこと」、「アメリカからの供与品、援助金の使用について実効のある監督権を組合組織に与えるよう要求すること」を訴えている。つまり、経済援助であるかぎりのマーシャル・プランは受け入れる、だがその軍事化には反対する、というのがその骨子である。この案は、次第にマーシャル・プランに積極的に傾いていった社会党と、マーシャル・プランを真向から〈悪〉としてはねつけた共産党との中間をゆくものであった。

その他、経済政策、文化政策についても若干の展望が語られているが、RDRの独自性を考える上で重要なのは以上の三点につきる。

③ サルトルの活動

RDR設立当初、サルトルの活動はきわめて積極的であった。三月十日の記者会見にはルッセ、ブービアン、ルウと共に世話人代表の形でインタビューに応じ、以後六月まで何回か催された講演会、大衆集会にはほとんど出席している。また九月までは運営委員会にも加わっていた。五月から刊行された機関誌ラ・ゴージュは、このサルトルとルッセの発言にもっとも重要な位置を与えている。

こうしたスポークスマン的な役割とならんで、ルッセ、ロザンタルとの三人で行った討論記録、『政治鼎談』にうかがわれる、理論家としての役割があった。二回にわたるこの討論記録で興味を惹くのは、ルッセとサルトルとの細

部にとどまらぬ意見の食い違い、とりわけ、RDRの意味づけについての発想の根本的な相違である。

まずルッセの方は一貫して、現実の政治状況の分析、とりわけ社会主義運動の変質の分析からRDRの存在意義を引き出そうとする。すなわち、フランスにおける階級構成の変化から説きおこし、ソ連における党と国家との一体化、国家機関による勤労者階級の搾取の問題にも踏み込みながら、労働者民主主義を再生させるものとしてのRDRの必要性を力説する。その彼のプログラムの中には、「新しい政治的前衛の形成」という展望が立てられている。この展望からすれば、RDRは政治構造が不確定な過渡期における一時的な政治形態を意味している。主たる狙いは未組織の無党派大衆への働きかけであり、「大衆そのものの再編成」が志向されていた。

いわば外からのこうした意味づけにたいして、サルトルの発言は次第に——第一討論においては受身のままで、第二討論においては積極的に——内からの意味づけに集中していく。たしかに当初においてサルトルをRDRの結成へと促したものは、米ソ戦必至論を排して冷戦構造を打破せねばならぬという、外の世界に対する危機意識であった。三月十日の記者会見でも、彼はこの角度からRDRへの参加を説明している。⁽⁴⁰⁾ところが第二討論の中での次のような発言は、単に共産党に対する批判としてだけでなく、ルッセに対する批判としても、またサルトル自身の当初の発想に対する自己批判としても読みうるであろう。

「ソ連やコミンフォルムや戦争の脅威とかは、現代の政治風土に常時存在する生きた要素ではあるけれども、それとても、たとえば坑夫にとっては、彼の状況から発する要請事項、つまり生活水準を上げるとか労働条件を改善するとかかという必要性との結びつきなしにまず考えられるならば、抽象的な思考要素になってしま⁽⁴¹⁾う」

そこで彼があらためて出発点に据えるのは、選挙人や活動家に譲渡されてしまっている「抽象的に思考する自由」と対置された、個々人の欲求に発する「具体的に思考する自由」である。そして、この具体的思考⁽⁴²⁾によって、R D Rの組織、政策を一挙に基礎づけようとするのである。彼はほぼ次のように言う。

——具体的な思考を営むのは具体的な集団である。すなわち生産者または消費者の集団である。したがって、R D Rは生産者と消費者という具体的な単位から出発した各セクションの〈連合〉ということになる。それは、一般的な政策を上から提示して細胞の議論に枠をはめる〈党〉の合意形式とは反対方向の運動によって支えられた組織となるであろう。マーシャル・プランにしても、もしも労働者の具体的な思考から発して問題を考察するなら、アメリカの出資とヨーロッパの社会主義的組織化とが同時に要求されるはずで、マーシャル・プランを頭から拒否する共産党中央の決定は、炭鉱の坑夫たちの直接的欲求と重なり合わない抽象的思考である……

その他、大衆文化の創造や労働者管理を先取りするであろう「企業に対する仮想管理」についての提言も、いずれも具体的思考の現実化、という発想の延長上で語られている。

ルッセとサルトルとの、方向を異にするこの二つの発想のうち、どちらがR D Rの発展に有効であったのか、また運動全体の中でどちらが主流であったのかは明らかでない。ただその鼎談に関するかぎり、両者は対立し合うというよりは補い合う関係、すくなくとも抵触はし合わない関係にある。ソ連社会主義の変質、労働者国家の死というルッセのテーゼに、サルトルは積極的に唱和してはいないが、全体としてはこれを認めているようである。というか、自分の持ちあわせていない政治的言語を豊富に繰り出してくるルッセの雄弁に一目置いている気配である。他方ルッセ

の方も、具体的な自由という視点からサルトルがRDRを論ずるときは沈黙を守りがちで、ときとしては社会主義運動の歴史的な展望の中に引き入れてこれを論ずる姿勢を見せてはいるが、サルトルに反論を加えているわけではない。ただ、ルッセのテーゼは反ソ反共の姿勢と固く結びついているところから、彼の発言は政治状況に密着して、現実的・戦略的である反面、状況の変化によっては右にも左にも動きうる可変性をのぞかせている。これに対しサルトルの主張は理念的、原理的考察にもとづいているがゆえに、ときに観念的に聞こえるが、そのときどきの政治状況に左右されることのない一貫性を予想させる。そこに両者の亀裂の兆がすでに潜んでいたことだけは指摘しうるであろう。

この鼎談におけるサルトルの発言の中でもっとも重要に思われるのは、RDRという政治運動に、いわば哲學的基盤を与えるべく提出された、「具体的に思考する自由」あるいは「具体的思考」という概念が、〈欲求〉の地平に位置づけられていることである。具体的自由という言葉それ自体はここで初めて使われたわけではない。すでに見てきたように、それは「唯物論と革命」の中で、思考の自律性と同義の内的自由に対立する語として用いられていた。それは「事物の決定論的秩序のさなかで、事物に対する行為の有効性によって自覚される自由」であつた。⁽⁴³⁾ところがRDRをめぐるこの討論、あるいはこれにやや先立つ三月十九日の大衆集会での発言（「RDRと自由の問題」）⁽⁴⁴⁾に出てくる具体的な自由、具体的に思考する自由は、〈欲求〉(desire)に直接接合されている。それは欲求の中で、欲求をとおして現われてくる自由であり、物質世界の中に根ざした欲求の直接的自己把握として定義されうる自由である。次の一節ならびにその前後の発言は、具体的自由を再び労働の一步手前に引き戻し、欲求の中に新たに位置づけようとする志向を告げている点で、サルトル思想の発展の大きな曲り角をなすものとして私は重視したい。

「次のことをよく理解しよう。われらの観念的思想家諸君ならそれを望むだろうが、思考は欲求に先行しはしない。それどころか、欲求はそれ自身として盲目でもなく、思考を欠いてもいないのだ。欲求とは欲求自身についての思考であると同時に、それを充たすのに適したさまざまな欲求の思考なのだ。飢え、これはもはや飢えまいとする意志だ。ぐうぐう鳴る腹だけになることの拒否だ。それはすでに反抗への呼びかけ、解放の願望になっている。それはさらに他人の飢えの深い理解だ。それは貧窮の中にある連帯の芽生えのようなものだ。最後にそれは生活条件の不平等を前にした憤慨だ。すなわち、飢えはその中に基礎的な正義の感覚を内包しているわけだ(……) すべての欲求はそれを越えてヒューマニズムへ向かうのだ。」⁽⁴⁵⁾

すなわち、「唯物論と革命」において描き出された〈労働のヒューマニズム〉に加えて、〈欲求のヒューマニズム〉というもう一つのヒューマニズム概念がここではじめて姿を現わしているのである。⁽⁴⁶⁾ たしかにここでは、〈欲求〉という言葉自体がまだ未熟である。〈欲求のヒューマニズム〉という言葉も用いられているわけではない。しかし、以上に引用した文章のうちから、欲求を原点にした新たな思想の胎動だけはうかがわれるであろう。

④ RDRの解体

RDRの現実の運動がどのように展開し、どのように終息したかは、アントワーヌ・ピュルニエの『実存主義と政治』⁽⁴⁷⁾がその概要を伝えている。ジョルジュ・アルトマンのフラン・ティール紙はもちろん、RDRと直接関係のないクロード・ブルデのコンパ紙、エマニュエル・ムニエのエスプリ誌などの日刊誌、月刊誌が強い共感をもってRD

Rの誕生をむかえたところから、発足当初は、パリでの大衆集会や各地での講演会は盛況をきわめたらしい。五月から刊行された機関誌ラ・ゴージュの各号には、その模様が誇らしげに報告されている。しかし、組織活動はパリをのぞいては弱体であり(パリでは各区ごとにセクションが形成され、ラ・ゴージュの各号にはその活動が予告されている)、「かなり幅広いが散漫な聴衆(ビュルニエ)」がムード的に周囲を取り巻いていただけというのが実際の姿であっただろう。ビュルニエによれば一九四九年一月段階での加盟者数はわずかに千九百であった⁽⁴⁸⁾。要求事項書運動も企てだけに終り、綱領も結局草案の域を出なかった。全国的な規模で運営委員会が持たれたのはやっと九月になってからであり、組織化の緩慢さを物語っている。また機関誌のラ・ゴージュにしても、五月、六月は月二回の発行、以後は週刊紙への飛躍を予告しながらも逆に月一回の発行に追い込まれ、四九年の三月、十三号でその跡を絶っている。

R D Rの運動が伸びなかった最大の理由は、既成政党、とりわけ社共両党の指導部による党員への強力な締めつけにあった。共産党はその当初からリュマニテ紙、アクション紙、フランス・ヌーヴェル誌など、党の機関紙(誌)を総動員して反R D Rのキャンペーンをはっていた。「レオン・ブルムに救いの手を貸すトロツキストたち」という非難が示すように、共産党がもっとも恐れていたのは、R D Rが「指導者の反動政策によって、党員と選挙民とを失いつつある社会党に、左から再び活力を与えること」⁽⁵¹⁾であった。他方社会党の場合は、少数反対派の中にR D Rへの加盟者が多く数えられた(彼らは党内でR D R派とも呼ばれた)ことから動揺は深刻で、四八年五月段階ですでに、社会党執行委員会名で、「第三勢力合同委員会への加盟を拒んだR D Rに、党の活動家が加盟することを禁ずる」⁽⁵³⁾との声明を発し、七月の全国大会でこれを党の正式の決定とした。以後、ジャン・ルウをはじめとするR D R派の一部は党を

去ることを余儀なくされた。また当初からRDRに加わっていたイヴ・ドゥシエゼルも、植民地問題をきっかけにして、十二月、仲間と共に社会党を出て革命的社会主义運動(ASR)に合流していった。その結果、RDRは社会党下部との接触を次第に失うことになる。主として社共両党に属する組合活動家への呼びかけを重視していたRDRにとって、この両面からの排斥は手痛い打撃であり、重大な誤算であった。

四九年初頭には、運動の停滞のみならず、運動に亀裂が生じてくる。前者は後者を促したと言うべきであろうか。シモーヌ・ド・ボーヴォワールによればそれは、ルッセを頂点とする指導部の右傾化に反共主義と、共産党との共同行動を望む一般活動家との亀裂であった。⁽⁵⁴⁾ルッセの反スターリン主義は鼎談での発言からも明らかだが、四九年二月、運動資金調達のためアメリカに渡り、CLO(産業別労働組合会議)と交渉を持ち始めた頃からその右傾化が顕著になった。ザ・ネーションでは「北大西洋条約は戦争の手段ではない」とアメリカ政府寄りの発言をし、⁽⁵⁵⁾さらに帰国(土産)として、四月三十日パリでRDR主催による「独裁と戦争に対するレジスタンスの日」をアメリカの二大労組の後援を得て企画するまでにいたった。これは同月二十日、ジョリオ・キュリーを議長として予定されていた共産党系の世界平和評議会大会に対抗してその「裏をかく」⁽⁵⁶⁾ために立てられた企画である。

シドニー・フックのような反共主義者がアメリカから送りこまれて開かれた「独裁と戦争に対するレジスタンスの日」が、RDRの一般活動家にどのように受けとめられたかは明らかでない。ただ、ラ・ゴッシュ紙が四月以後発行されなかったという事実があり、そこに、内部的紛糾の影響を見ることができるかもしれない。サルトル自身は、メルロオリボンティ、リチャード・ライトと連名で、アメリカの政策を非難するメッセージを送っただけで、この集会

には参加しなかった。さらに六月(三十日)には、みずからイニシアチヴをとって臨時総会を開かせ、ここでルッセをきびしく批判した。総会はルッセを非難する決議を採択した。⁽⁵⁷⁾この時点でRDRは事実上分裂したとみることができ⁽⁵⁸⁾る。

RDRの停滞も、分裂も、その奥深い理由は、四八年から四九年にかけての国際状況と、そのフランス社会へのはね返りの中に求めらるべきであろう。四八年二月のチェコ共産党の政権奪取、六月二十日ソ連によるベルリン封鎖、同二十八日コミンフォルムからのユーゴスラヴィアの除名、といった一連の出来事は、「社会主義的中立ヨーロッパ」の構想をきわめて非現実的な夢想と見させる、反共主義の気運を一般に醸成していった。ブルデなどによって主張されたフランスの武装中立論さえも北大西洋条約の締結(四月四日)を妨げえなかった状況の中で、マーシャル・プランの非軍事化という主張はまったく無力だった。その意味では、ビュルニエの指摘するように、「〈運動〉が闊おうとしたほかならぬ冷たい戦争が、RDRに打ち勝った⁽⁵⁹⁾」のである。

RDRの活動の中で、振り返ってみて、もっとも評価しうるのは、その反植民地主義キャンペーンであろう。RDRの綱領草案には海外植民地における「表現、結社、自決の民主的自由」が原則としてうたわれ、『政治鼎談』の中ではさらに、「海外領土の民衆に独立の権利を与えること」という点で出席者の意見の一致が見られている。またラ・ゴーシュ紙には、当時の紛争点であったインドシナとマダガスカルについて多くの紙面がさかれていた。ホー・チ・ミンとの交渉を要求する請願書運動⁽⁶²⁾、インドシナ状況についての報告会活動もRDRのイニシアチヴによって行われた。のみならず、ラ・ゴーシュ紙は、すでに北アフリカ(モロッコ、アルジェリア)にも、国内の移民労働者問題⁽⁶³⁾にも

目を向けていた。それは、社共両党をも含めて歴代の内閣、ならびに一般世論が植民地問題に驚くべきくらい冷淡であった当時の風潮の中で特筆すべきことであろう。やがてアルジェリア戦争下で激しい反対闘争の核を形成していったのも、ルウ、ブルデ、ジャンソンなど、多少ともRDRに関係したメンバーであった。

⑥ RDRにおける失敗の意味

RDRの解体は、サルトル自身にとっては大きな挫折として経験されたに違いない。幻のうちに消えてしまった「社会主義と自由」の運動を別にすれば、RDRはサルトルにとって最初の政治的実験であったし、何よりもここで、〈革命の哲学〉の現実化、アンガジュマン文学と即応する形で政治的アンガジュマンの可否が問われていたはずなのだから。「RDRの分解、手痛い打撃」と後に彼はノートに書き記している。⁽⁶⁴⁾だが正確にはそれはいかなる意味での打撃であり、挫折であったのか。

ノートの先には、この政治的失敗の経験から引き出された教訓が次のように記されている。

「RDRの分解。手痛い打撃。現実主義の、新たな、決定的な修業。運動は創り出すものではない。」

〔連合〕は客観的状况によって定められる抽象的な欲求にはたしかに応じていた。だが人びとの中にある現実的欲求には応じていなかった。」

この反省は、先に引用した二回目の討論記録の中で発言と部分的に対応しており、その意味するところは明らかであろう。ここには、ある種の原則なり理念なりに発して政治運動を外から創り出そうとする抽象的思考——たとえ

ば『文学とは何か』の結末で表明されたように、「社会主義的ヨーロッパ」を創り出そうとする抽象的思考——への自己批判がこめられている。運動は、現実的な欲求に根ざした生成であることが示唆されている。RDRの失敗はサルトルにとってまず第一に、観念論的な政治の挫折を意味していた。

他方、「メルロオロポンティ」(『シチュエーションIV』)の中の次の一節は、RDRの苦い経験からきたもう一つ別の教訓を語っている。思想にとっての政治の力学、という教訓と言おうか。

「共産党のすぐ近くに生き、いくつかの批判を党に認めさせるためには、われわれが政治的に無効であり、しかもむこうがわれわれの中に何か別の有効性を感じとる、ということがまず必要だったのだ。⁽⁶⁵⁾」

思想は政治行動を促すが、政治行動は必ずしも思想の現実化を保証しない。思想が自己を実現するためには、政治行動への特殊な位置どりを必要とするであろう。RDRの経験とはサルトルにとって第二に、この位置どりの失敗の経験であった。同じ文章の数行先のところで、RDRに対するメルロオロポンティの姿勢を振り返りながら、彼はこう書いている。

「メルロオは、われわれの誤りを、また政治思想とはそれ自身の果てまでいき、そしてそれを必要とする人々によってどこかで再び取り上げられないかぎり、容易に具現されるものではないことを、私に先んじて発見したのであるうか?」

前述のように、サルトルをRDRへと踏み切らせた奥深い動機を、ポトヴォワールは、サルトルの政治的発言に対

する人びとの憎悪と、そこから生じた「自己自身に対する新しい関係」のうちに見ている。すなわち、他者（それも自分が加担しようとしている大衆）の憎悪をとおして顕示された自己の〈客体性〉を取り戻そうとしてRDRへ参加した、と説明している。この証言は、以下に続いて引用されたサルトルの「ノート」の次の一句、「一九四七年以来わたしは二重の照合原理を持つようになった。わたし自身の諸原則を、他人の——マルクス主義の——諸原則からも判断していた」と共に、この時期のサルトル思想の展開について貴重な照明を投げかけている。すなわち、四十年代のサルトルから五十年代のサルトルへと、文学作品をとおして検証されうる変貌の核心にある、對他存在の積極的な引き受けの起源を正確に指し示しているのである。それはまた、サルトルの、マルクス主義者としての自己形成も、その奥深いところにおいて、対自存在と對他存在との葛藤という、存在論的なドラマと密接に結びついていることもあかしている。

それでは、RDRの運動を挫折として体験したときに、この自己の〈客体性〉の引き受けの問題はどのように展開されうるであろうか。これはまた稿をあらためて検討する必要がある。

(1) 一九四五年九月、ホー・チ・ミンはハノイで、ヴェトナム民主共和国の成立を宣言した。しかしフランスの保守勢力と軍隊は植民地的秩序への復帰を目ざして武力介入を行っていた。そこでホー・チ・ミンは完全独立を求めてフランス政府との交渉を重ねていたが、四六年十一月ハイフォンで、税関でのコントロールをめぐって砲火がまじえられ、これを機にフランスの水上機、艦砲がハイフォン市を爆撃し、約六千人の死者をまねいた。いわゆるハイフォン事件である。これによってホー・チ・ミンは交渉を断念し、長期武装闘争を開始する。以後次第に全面化していくインドシナ戦争は、八年にわたる

歴代のフランス政府の命取りになった。

(2) マダガスカル島は一八九六年以来フランスの軍事征服によって植民地化されていたが、一九四六年、連邦政府が認められた。しかし、マダガスカル革新民主運動の指導者たちはこれに甘んじず、以後も紛争が絶えなかった。一九四七年三月三十一日、ついにそれが大衆暴動に発展し、フランス人二百名が殺された。これに対しフランス軍当局は大弾圧を行ない、公式にはいかなる数字も発表されなかったが、女子、子供を含めた八万から十万(人口四百五十万)のマダガスカル人を虐殺したという(エスプリ誌によれば十八万名)。なおその後マダガスカル島は、五八年十月フランス連邦の一つとして自治権を獲得、六〇年六月二十六日正式に独立して、マダガスカル共和国が成立した。

(3) その真の理由は国際状況、とりわけトルーマン宣言の影響であったとみられる。

(4) アレクサンダー・ワース『フランス現代史、上』三五二頁。

(5) Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, p. 481.

(6) ルフェーヴルは次のように書いている。「ポール・ニザンはほとんど友人を持たなかった。そこでわれわれは、いったい彼の秘密は何なのかを不審に思っていた。われわれは今ではその秘密を知っている。彼のすべての本が裏切りの観念のまわりをうろろうめぐっている。」

「彼は、反動的な、ファシスト的なとさえ言える階層の出身だった。おそらくはまだその一部をなしていたのだ。なぜならこの階層のスパイをすると主張していたのだから。」(Henri Lefebvre, *L'existentialisme*, p. 56.)

(7) 二十五名の連名で発表されている。前後の経過からサルトルが音頭をとったことに疑いはない。署名者の中にはレイモン・アロン、アンドレ・ブルトン、アルベール・カミニ、モーリス・メルロオロポンティ、フランソワ・モーリアック、ジャン・ポーラン、ジュリアン・パンダなどの名前が見出される。

- (8) Les Lettres Françaises, 11 avril, 1947.
- (9) ニザンの名譽回復については、彼の友人であった当時のCNE会長、ルイ・マルタン・シヨフィエが個人的に、「ニザンは密告者にあらず」という一文を発表し、ニザンの無罪を証言したのが注目される (Caliban, 15 mai, 1947.)
- (10) Le Figaro Littéraire, 28 juin, 1947. なお、この公開状はレ・タン・モデルヌ誌七月号にも掲載された。
- (11) Les Lettres Françaises; 4 juillet, 1947.
- (12) Simone de Beauvoir; La force des choses, p. 58.
- (13) 第四章は三回にわけて発表され、共産党批判に費やされた最終部は、〈ニザン事件〉についての最終的な報告が載せられたレ・タン・モデルヌ誌の同じ七月号である。
- (14) Situations II; p. p. 280-281.
- (15) 個々の読者 (lecteurs) はいるが読者層 (public) を持たないブルジョア出身の作家にとっては、やましい意識にとらわれたブルジョアが今のところ唯一の読者である。ところが彼らに対しては、不幸の意識を映し出す以外に作家は言うべき言葉を持たない。プラクシスの文学、生産性の文学の主体となるべき読者は、「生産者にして革命者」である労働者階級のうちに求められるべきである。ところが彼らとブルジョア作家との間には〈党〉という鉄のカーテンが介在している。したがってこの潜在的な読者層に到達しようとするなら党に入る必要がある。しかし……という文脈の中でこの問いが立てられている。
- (16) 拙稿『唯物論と革命』と〈アンガジュマン〉(『一橋論叢』昭和五十二年八月号) 参照。
- (17) Situations II, p. 287
- (18) *Ibid.*, p. 314.

サルトルと革命民主連合 (RDD)

- (19) *Ibid.* p. 313.
- (20) *Ibid.* p. 314.
- (21) *Ibid.* p. 315.
- (22) *Ibid.* p. 289.
- (23) Simone de Beauvoir; *La force des choses*, p. p. 163-164.
- (24) ポーヴォワールは『文学とは何か』を解説しながら次のように替えている。「彼を排斥することによって、コミュニストたちは彼を政治的に無力な状態に追いこんでいた。しかし、命名するとは開示することであり、開示するとは変革することであるから、サルトルはアンガジュマンの考えを掘りさげつつ、文章表現の中にプラクシスを見出していった。」(傍点引用者) (*La force des choses*; p. 146.)
- それにしても、なぜし。かし。な。か。このし。か。し。は。ま。ま。に、政治的(アンガジュマン)から文学的(アンガジュマン)へのめりこみを指し示している。
- (25) 「形式的自由と物質的要求との」この対立は乗り越えうるものであることをまず確信しよう。文学自体がその証しを提供してくれている。なぜなら文学は、もろもろの完全な自由語りかける一個の全的自由の作り出すものだからであり、したがって、人間の条件の全体性を一個の創造的活動による自由な生産物として、それなりに表明しているからである。」(Situations II, p. 299.)
- (26) 「弊害や不正を美文で告発することも、ブルジョア階級について才気ある否定的な心理研究をすることも、ペンを社会主義的諸政党に奉仕させることさえも、もう十分ではない。文学を救うためには、われわれの文学において立場を取らねばならないのだ。なぜなら文学は本質的に立場を取ることなのだから。」(*Ibid.*, p. 300.)

- (27) Combat, 18 octobre, 1947.
- (28) 戦争不可避論に対する警告をサルトルは一九四六年以来何回か発している。テキストとして La guerre et la paix (Franchise, n°3, novembre-décembre, 1946), Gribouille (La Rue, n°12, novembre, 1947) などがある。
- (29) Les Ecrits de Sartre の著者たちによれば六回であるが、ここには十月六日の第一回放送が数えられていない。第三回以後のテーマとしては「ユダヤ人問題」共産主義などがあった。
- (30) 国内政策が白紙であるだけに、そこに左翼のつけこむチャンスがある、として、ドゴール派の左派(マルロオ、スース、テル)にメルロオリボンナイが期待をかけているのが注目される。
- (31) Les Ecrits de Sartre, p. 194.
- (32) La Pensée socialiste, n°18, novembre, 1947
- このテキストは後に「何故革命民主連合か」と題されてジャン・ルウの評論集の中に収められた。Jean Rous; Itinéraire d'un militant, 1968.
- (33) と同時にもう一つ、ジャン・ルウの告白によれば、言葉には表われてこない隠された意図があった。(連合)をとおして、社会党に「再び活力を与える」という意図である。前掲書参照。
- (34) Combat et Franc-Tireur, 27 février 1948.
- (35) La Gauche, 15-31 mai.
- (36) 全文は La Pensée socialiste, n°19 に載せられた。
- (37) だがそれがなぜ政党であってはならないのか。この問いに対する回答は、ルッセとサルトルでは若干違っている。ルッセはその理由を二つの面から説明する。政党というのは階級の基本的利害を担っている。新たな権力を築きあげるためには

サルトルと革命民主連合 (RDR)

この階級を動員せねばならない。だがそうするためには国家の本性、階級と私有財産との関係、現代における階級の力学など、「原則問題」について明白な答を出さねばならぬ。ところが現代は社会的危機が豊かで新しい体験を背景とした問いかけを出してくるので、既成の用語では十分な回答が与えられない。理論的解答を見出すためには、社会の日常的な進展と生きた接触を保ちつつ、限定された目標について共同の実践を行っていく必要がある。他方、政党というのはいくつかの社会階級の表現であるがRDRは中産階級と労働者階級の二つにまたがる。したがって連合でなくてはならぬ、というのである。これに対しサルトルは、政党の分布が右から左に隙間なく及んでいる現状の中では、〈社会的空白〉が存在せず、既成組織の間に新党を滑り込ませる可能性はない、という現実的診断を根拠としている。

(38) 同じ考えが一九六八年の〈五月〉に、地区委員会の目標とされたことに注目しておこう。

(39) 綱領草案ではこう記されている。

「RDRの根本的な獨創性は、ただ単に権力奪取にむけて方向づけられた組織であるだけでなく、具体的な諸目標について、行動によって直接自己の状態を改善しようと決意した労働者たちの連合である、という点に存する。」

(40) Franc-Tireur, 11 mars, 1948.

(41) Entretiens sur la politique, p. 108.

(42) 「具体的思考とは一体何か。それは問いの立て方の中にあるある種の順序として定義される。どんな問題も宙には浮ぶじやないのだ。」(Ibid. p. 105.)

(43) Situations III, p. 199-201.

(44) Le RDR et le problème de la liberté (La Pensée socialiste, n°19, 1^{er} trimestre, 1948, p. p. 3-5.)

この集会においてサルトルは、記者会見での発言とは視点を交えて、「諸君と共に、諸君によって、自由の意味を再構築し、

再発見すること」をRDDの目的の一つとして強調している。すなわち、日常的なもろもろの要求事項は、それが飢えの充足であれ、労働条件の改善であれ、平和であれ、常に具体的な自由（「階級なき社会のただなかで各人が自己の人生の責任者となりうる自由」という定義がここでは与えられている）への要求と結びついていることを示した後に、この自由の実現を、物理的的要求がすべて充たされるであろう本来の社会主義に委ねずに、現在時点での個々の要求そのものの中で再発見しようとする、そのような試みの場としてRDDを紹介している。

(45) *Entretiens sur la politique*, p. p. 105-106.

(46) 前掲テキスト「RDDと自由の問題」の中では、飢えとならんで平和もまた欲求の一つとしてあげられていることに注目しておこう。

(47) Michel-Antoine Burnier: *Les existentialistes et la politique*, 1966.

(48) 『反逆は正しき』の中では、サルトルは一万か二万という数字をあげている。

(49) 九月十九日、二十日の二日間パリで開かれた。La Gauche, n°6 septembre, 1948 には主な出席者の名が記されているが、サルトルの名は見えない。この時点ですでに運営委員会からは身をひいていたらしい。

(50) フランソワ・ヌーヴェル誌の論評。(La Gauche, n°12, février, 1949 46)

(51) リュベニテ紙の論評。(La Gauche, n°2, 1^{er} au 15 juin, 1948 46)

(52) 「当時、共産党の指導者たちは、RDDが、息も絶えだえの社会民主主義に《再び活力を与える》手段として敵方の社会党指導部によって考え出されたのではないかと恐れていたが、これは相手の政治的知性を明らかに過大評価していた。」

(Jean Rous; *Itinéraire d'un militant*, p. 155)

(53) La Gauche, n°12 février, 1949 収録。

サルトルと革命民主連合(RDR)

- (54) Simone de Beauvoir; La force des choses, p. 189
- (55) Michel-Antoine Burnier; Les existentialistes et la politique, p. 73
- (56) On a raison de se révolter, p. 29.
- (57) Simone de Beauvoir; La force des choses, p. 194.
- (58) これ以後のRDRの活動を伝える資料が見あたらないところから、運動は事実上、〈眠り込んで〉しまったのだろう。ただ解散はせずに形だけはおおしばらく維持されたい。サルトルは十月に正式に脱退を発表している。なおルッセは以後ドゴール派の議員となった。
- (59) Michel-Antoine Burnier; Les existentialistes et la politique, p. 75.
- (60) MRPと社会党を中心とする当時のフランス政府は、ホー・チ・ミンと戦う一方、バオダイ元皇帝を擁立して傀儡政府をでっちあげようとしていた。これに対してRDRは、一部の利権者たちに引きまわされる〈汚ない戦争〉を告発し、ホー・チ・ミンとの直接交渉を要求していた。
- (61) マダガスカル島では前年三月の暴動鎮圧後も軍隊によるきびしい弾圧が続けられ、〈責任者〉としてマダガスカル民主革命運動のリーダーに対する裁判が行われていた。ラ・ゴーシニ紙第六号にはこの裁判をゲシュタポによるそれに比較した一文が大きく掲載されている。
- (62) ラ・ゴーシニ紙第十号(四八年十二月)にアビール全文と発起人の一覧が掲載。
- (63) La Gauche, n°7 octobre, 1948.
- (64) Simone de Beauvoir; La force des choses, p. 194.
- (65) Situations IV, p. 223.

(昭和五二年一月一四日 受理)